

「Abdominal Ultrasound—A Basic Textbook」

札幌医科大学名誉教授・機器診断学 福田 守道 著
Professor of Clinical Ultrasound, Department of
Imaging, Royal Postgraduate Medical School at
Hammersmith Hospital, London, U.K. David O.Cosgrove

筑波大学臨床医学系講師

植 野 映

超音波医学における世界の巨匠、福田守道教授と David Cosgrove 教授による共著「Abdominal Ultrasound」が発刊された。福田教授は、長年、腹部超音波診断に携わり、特に超音波内視鏡の開発者としてその名を世界に轟かせた研究者である。数々の業績を残してきたが、その集大成として 1994 年 7 月に札幌で第 7 回世界超音波医学学術連合大会 (WFUMB: World Federation for Ultrasound in Medicine and Biology) を主催し、大成功を収めた。Cosgrove 教授は放射線科医であり、超音波の原理に精通し、卓越した臨床能力を持つ。最近では、カラードプラにおいて更に業績が認められ、Hammersmith Hospital の Royal Postgraduate Medical School 教授として迎えられた。彼は、婦人科、泌尿器の領域も含めて腹部臓器全般に超音波を研鑽し、そのカバーする範囲は福田教授同様に広い。しかしながら、個人で腹部臓器すべての超音波診断学を網羅することは到底不可能であろう。この本は、両教授の知識と技術を補いながら、また、いろんな研究者の好意により珍しい症例の提供を受けて、総合的な教科書

として完成されている。

英文も簡潔、明瞭である。Cosgrove 教授は英国においても文章表現のうまい医学研究者と言われており、英国内での論文は優雅である。本著は、日本人あるいは国際性をも意識させたか、American English のスタイルを取り、比較的平易な表現となっている。辞書なしでも肩肘はらずに寝ころんで読めるのはありがたい。用語もスタンダードとなっており、英文でレポートを記載する際には大いに参考になるであろう。

授業時間の削減により、学生が超音波の基礎を系統的に学ぶ講義がなくなってきた。超音波診断装置の急激な発展により、解像度の良い断層像が得られるようになり、解剖学的な知識のみでもそこそこの診断を下せるようになった。ここに大きな落とし穴がある。超音波は非侵襲的な診断技術が最大の特徴であるが、アーチファクトが多いのもこの診断法の特徴である。この理解なしに超音波診断を下すには大きな危険性を孕んでいる。私自身も駆け出しのころ、ミラーイメージを知らず、気管内に腫瘍があると判定し、正常な気管の内視鏡検査をしてしまった苦い経験

がある。本著では Diagnostic Problems in Ultrasound の項でこれらの pit fall を簡潔にまとめてあり、非常にためになる。基礎的な講義を受ける機会のなかった学生、レジデントらは自ら時間を作り、超音波検査での Golden Rule をぜひ会得していただきたい。精密なイラストも添えられており、特に脾臓、膵臓の項ではイラストのコントラストがよく、わかりやすい。経験が少ない読者にも理解が得られるであろう。

通常の参考書では basic なパートは英文で読むと途中で挫折しやすい。ところが、本著は所々に飽きさせないスパイスが振り掛けられている。タイタニックの事件が超音波の発展を加速させた、SONAR の語源、二人の Dussik の関係、電子式のリアルタイムを発明した Bom は NATO 出身だったなど、ちょっとした興味を誘う。読み出したら、やめられない著書である。

● B5 頁 376 図 410 写真 421 表 11 1997 定価 (本体 17,500 円 + 税) 〒 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)